

AOGS 16th Annual Meeting

氏名：西村 信彦

所属：太陽圏プラズマ物理学研究室 (D3)

滞在期間：令和元年7月28日～8月3日

滞在先：シンガポール

滞在国内：シンガポール

私は、7月28日から約一週間、シンガポールに滞在し、AOGS 16th annual meetingに参加させていただきました。海外へ行くのは今回が初めてで、このように海外に滞在すること自体も良い経験となりました。

私は今回、「Comparison of Cylindrical Interplanetary Flux Rope Model Fittings with Different Boundary Pitch Angle Treatments」というタイトルで口頭発表をさせていただきました。発表内容は、惑星間空間で観測される惑星間空間フラックスロープ(IFR)と呼ばれる磁場構造の解析手法に関するもので、IFR解析における重要な知見を報告させていただきました。英語での発表は今回でまだ二回目で、まだ英語での発表に慣れていなかったため、発表までの数日間、時間が空いたときには何度も発表練習をしていました。その甲斐あって発表を時間内に納めることができましたし、込み入った説明もスムーズにわかりやすく行えたのではないかと思います。質疑応答では、前回の発表での課題を踏まえ、質問の内容を落ち着いて理解してから答えることを目標に挑みました。その結果、質問に途中からついていけなくなった場面では、その旨を質問者に伝え、わかりやすく質問を言い換えてもらうことで質問を理解することができました。質問への回答も多少時間がかかっても落ち着いて答えることができ、質問者に回答を納得してもらうことができました。

私の研究分野は上にも述べたようにフラックスロープという磁場構造の研究ですが、国内学会ではこの分野だけをメインとしたセッションを見たことがなく、いつも宇宙天気や太陽圏という大きなくくりでのセッションにおいて一人か二人ほどしか発表者を見ませんでした。しかし今回はフラックスロープをメインとしたセッションがあったことから、この分野の注目度を感じました。私が発表を行ったのもこのフラックスロープのセッションであり、様々なフラックスロープ研究の発表を聴くことができました。その中でも特に、私がフラックスロープ

の文献でたびたび目にしていた Yuming Wang さんの発表内容は私の研究内容の一部と非常によく関連していたこともあり、興味深く思いながら聴いていました。彼の発表では、フラックスロープが持つ螺旋状の磁力線のツイストが太陽からの距離依存性を持つかどうかを調べていました。私の研究ではツイストと似たピッチ角という量がキーワードとしてあるため、今後彼の研究が論文文化されたときにはその論文をよく理解するとともに私の研究との関係を考えていきたいと思っています。他にも、太陽コロナにおける複数のフラックスロープの相互作用についての発表があり、コロナグラフの画像からフラックスロープの磁場構造を解釈する際に参考になりそうな部分がありました。私の研究は最終的にはコロナグラフの画像から推定したフラックスロープの磁場構造と惑星間空間で観測されたフラックスロープの磁場構造とを比較しようと考えているため、今後の研究の参考になりそうだと思います。このように今回の学会では有意義な時間を過ごせたと思います。

最後に、このような英語能力向上の機会に対して、旅費支援を頂いた宇宙環境研究所国際連携研究センター若手海外派遣支援プログラムの関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

<指導教員>

徳丸 宗利